# 令和３年度
# 東京都現代美術館美術資料収蔵委員会
# 評価部会

令和４年１月26日（水）

東京都現代美術館

午後２時開会

**大森文化施設担当課長：**それでは、定刻になりましたので、ただいまより委員会を始めさせていただきたいと思います。

本日は、お忙しい中御出席いただきましてありがとうございます。ただいまから令和３年度東京都現代美術館美術資料収蔵委員会の評価部会を開催いたします。

私は、東京都文化振興部文化施設担当課長の大森と申します。よろしくお願いいたします。本日、私が司会を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

まず、本日御出席いただいております委員の皆様を御紹介させていただきたいと思います。私から向かって左の席の方から御紹介させていただきます。

石井孝之委員でございます。

児島やよい委員でございます。

佐谷周吾委員でございます。

千葉由美子委員でございます。

長門佐季委員でございます。

平野到委員でございます。

前山裕司委員でございます。

南雄介委員でございます。

よろしくお願いいたします。

続きまして、事務局職員を御紹介させていただきます。

東京都現代美術館副館長の茂木でございます。

同じく東京都現代美術館事業企画課長の加藤でございます。

同じく東京都現代美術館事業係長の岡村でございます。

どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、まずお手元の資料の御確認をお願いいたします。

まず、会議次第がございます。次に、資料１から資料５までの資料及び評価表がございますので御確認ください。

まず、右上に資料番号が振ってありますけれども、Ａ４縦の資料１、東京都現代美術館美術資料収集方針、続きまして、資料２、Ａ４横のホチキス留めの冊子になります令和３年度東京都現代美術館収集候補作品一覧表、続きまして、資料３、こちらもＡ４横の作家・作品説明書のホチキス留めの資料になります。次に、Ａ４縦の資料４、東京都現代美術館美術資料収蔵委員会設置要綱、続きまして、Ａ４縦の資料５、評価部会委員名簿になります。あと、資料番号は振っていないですけれども、Ａ４横でホチキス留めの評価部会評価表の資料があると思います。よろしいでしょうか。

もし過不足がありましたら、事務局職員までお申し出ください。配付いたしました資料につきましては後ほど回収させていただきますので、よろしくお願いいたします。

今回、評価対象資料の価格評価に関する議事は、東京都現代美術館美術資料収蔵委員会

設置要綱第11により非公開となります。

当部会の議事録につきましては、同要綱第11の第２項の定めに従いまして、美術資料収集決定の後、公開を予定しております。公開に当たりましては、委員の皆様に個人情報など公開に差し障りのある内容はないか、追って確認させていただきたく存じます。

それでは、早速ですけれども議事に入ります。

まず、本日審議いたします収集作品の説明をお願いいたします。

**茂木副館長：**収集作品について御説明いたします。

本日審議をお願いする作品は、購入９点、寄贈11件です。これら作品の収集については、午前中実施のコレクション部会で承認されております。作品の詳細は事業企画課長の加藤、事業係長の岡村及び担当学芸員から御説明いたします。

**加藤事業企画課長：**では、御説明させていただきます。私のほうからは、今年度、今回の収集につきましてのおおよその方向性について、まずはお話をさせていただきます。

それに先立ちまして、美術資料の収集方針の４点につきまして御説明を申し上げます。資料１の美術資料収集方針を御覧ください。

方針策定の趣旨といたしまして、21世紀の美術文化を担う東京都現代美術館の美術資料の収集に当たって、その方針を定め、首都東京、国際都市東京の美術館にふさわしい美術資料の収集を図り、常設展示の一層の充実を目指すとしてございます。

２の収集の基本的考え方といたしましては、（１）から（５）までを定めております。

そして、３の収集方針に関しまして、（１）収集対象は、おおよその時代を区分、地域等を定めたもので、（２）の収集分野はジャンルを示してございます。３の収集方針に関しましては、お手持ちで配付させていただいております資料の一覧表では収集方針の欄、そして、作家・作品説明書では該当する規定の欄にこの３のうちのどれに当たるかというものをお示ししてございますので、御参照いただければと思います。

今回の収集に関しましては、まずは海外作家に関しましては、クリスチャン・マークレーでございます。そして、大筋といたしましては、三上晴子から、ＭＯＴアニュアルの出品作家、そして、百瀬文などの若手作家に至るまでの幅広い年代の作家であると同時に、ジェンダーバランスにも配慮した形で収集候補作家を選定しております。

個別の作品の概要につきましては、岡村から御説明をさせていただきます。

**岡村事業係長：**それでは、この後、作品を検分いただきますので、概要のみ作家・作品説明書、資料３に従いまして、通しで御覧いただければと思います。

まず、１番「リサイクリング・サークル」、クリスチャン・マークレーさんの作品です。クリスチャン・マークレーは現在個展開催中で、現代美術、それから実験音楽双方の領域において重要な仕事をなしてきた作家と認識しております。今回お諮りいただきます作品につきましては、購入のリストの１番、２番のものと、寄贈で別途２点の組み合わせで今回の委員会に諮っております。１番の「リサイクリング・サークル」が12台のＰＣモニターを使った映像、音響のインスタレーションになってございます。マークレーにつきまし

ては、映像作品等はエディションを設けられておりますが、こちらのリサイクルの機材を使いましたインスタレーションは、2005年に東京での展覧会に向けて日本の技術者等と一緒に作られたもので、その後、国内でも発表された後、今回の個展の中でも紹介させていただいております。今回お諮りしている４点とも、その一連のシリーズの中の主要な作品でございます。取引事例としましては、映像インスタレーション物の事例を挙げさせていただいておりますが、御承知のとおり、ヴェネチア・ビエンナーレで金獅子賞を取るなど、既に海外の著名な作家のリストに上がる作家の作品ですので、一定の金額がありますが、この類例の作がほかにないので、それに相応する取引事例の記載がございませんことをお断りしておきます。作家自身も、この一連の作品につきまして、日本、東京でしかるべきところにきちんとまとまって収蔵されることを望んでおられることから、寄贈と併せて今回お諮りしている次第です。そういったことで、クリスチャン・マークレーの作品、１番が「リサイクリング・サークル」、２番が「ラップトップ・プレイヤーズ」、こちらもラップトップを使った作品になっております。後ほど実見のときにまた詳しく御覧ください。

続きまして、３番、４番、５番、６番までが、三上晴子さんの作品になります。まず３番の「スーツケース」は、９点のオブジェをベルトコンベヤー上の台の上に置いて設置しているインスタレーションビューが出ておりますけれども、このシリーズは、三上さんのジャンクアートと類されるような初期の作品の中で、多くのものが作家の手によって廃棄される中、残された貴重な作例になっております。その点においても類例がないのと、三上さんの作品は後年、メディアアートの作品に推移していきますので、そういった意味でも、公立美術館で収蔵するという機会にこれまで恵まれてこなかった作家の一人かと思われます。同一作家の取引事例としましては、そういった形で、そのものを購入するという事例がないのですけれども、2009年度発表するために委託をされたメディアアート作品の事例としましては、このような金額の実績がございます。これが収蔵ということで登録されたのが2017年ということです。なので、その間にこういったメディアアート作品も収蔵していくという風に考え方が変わってきたということの現れかと思います。三上さんについては、近年、包括的な調査が行われまして、その先駆性ですとか評価は今後さらに高まるところではないかと思いますし、当館においてその収蔵をすることによって、また新しい議論を生んでいければと考えております。同じ三上さんの作品４番の「Mirror」、５番の「Security Mirror」、６番の「Scale」の３点につきましては、レントゲン藝術研究所で93年に行われました「ICONOCLASM」展に出品されたその当時のオリジナル作品でございます。取引事例については、前項と同様にないのですけれども、今回きちんと収蔵するということに逆に意味があるかと考えております。

続きまして、購入、７番の手塚愛子さんの作品です。手塚愛子さんは、1976年東京都生まれで、当館では2008年の「ＭＯＴアニュアル」に御出品いただきまして、その前後に作られた作品が収蔵及び寄託で当館のコレクションとしてその後も公開されております。その後、御本人はヨーロッパに拠点を移されまして、新人作家から中堅へと活躍の場を着実

に広げてこられている作家さんと思われます。今回は、若手のときにアニュアル等の機会で１度購入した作家であっても、その後の着実な歩みがあり、また、今後の展開が期待される作家については重ねて購入するということも重要なのではないかという議論の中で、こちらの作品をお諮りしております。取引事例としましては、近年、海外の美術館にも入っておりますので、一定の価格で取引があるということが見ていただけるかと思います。

続きまして、８番の大岩オスカールさん、「隔離生活シリーズ」です。大岩オスカールさんも当館ではＭＯＴアニュアルに相当する国際グループ展、「ギフト・オブ・ホープ」展でいち早く紹介した後、2008年に個展を開催している作家です。そこから複数点の収蔵が既にあるのですけれども、今回、コロナ禍下でデジタルドローイングを日々描かれていたのですけれども、こちらのシリーズ全20点をシルクスクリーンとして展開したものを、今現在展示中なのですけれども休室中の「ＭＯＴコレクション」展にて紹介しております。これは、そのコロナ禍における日常を記録したものであると同時に、こういった状況下における創作ですとかイマジネーションによって、その状況を越えた旅をするというような広がりの中でコレクション展でも非常に好評を得ている作品でございます。取引事例としましては、2010年、2014年、2008年の時点での取引でこのような数字が上がっております。近年は海外での収蔵も増えてきているようです。このドローイング・シリーズにつきましては個別にタイトルやエピソード等も加わっておりまして、この辺を併せて展示するような形になっておりますことが添付のリストでもお分かりいただけると思います。会場のほうでも御覧いただけます。

続きまして、映像作品で、９番、マヤ・ワタナベさんの「境界状態」という作品です。マヤ・ワタナベさんは南米の御出身なんですけれども、現在はアムステルダムを拠点に活躍をされていらっしゃいます。今年度の「ＭＯＴアニュアル」に出品されまして、この提案の本作と合わせて３作品をかなり大規模なインスタレーションで御紹介いたしました。その中でも秀逸だったこの１点を収蔵としております。65分の作品なのですけれども、こちらは事前にリンクをお送りしておりますが、ペルーでの政治的混乱の中の暴力の痕跡が残されていると思われる集団墓地の発掘に加わって、その現場の土壌を微細に記録したものです。65分という尺ですけれども、それを短い時間でそういうものだというふうに見ることもできるし、作品としては、長尺で見たときにも映像として、ミニマムな作品ではありますが、深く読み込んでいくこともできる優れた映像作品だと思われます。また、展示につきましては、会場の形に合わせてスクリーンサイズ等、また、インスタレーションの形等を変形できるという意味でも汎用性の高い作品かと思います。作家の取引事例としましては、海外の公立美術館２館に既に入っておりまして一定の金額がついておりますが、こちらに記載している金額は海外の事例ですので、税金ですとか手数料等は上乗せされていない金額になっておりますので、御留意ください。また、エディションは５分の２となっております。

続きまして、ここからが寄贈なのですけれども、10番、クリスチャン・マークレーの「ア

センション」と、11番「セル・フォンズ」になります。こちらも購入で検討して挙げさせていただきました２点と同様のシリーズからの作品になります。注記もしてございますが、「アセンション」のほうは、フォークリフトにモニターを設置するというような形の展示になってございますが、フォークリフト自体は金額に入ってございません。都度調達してよいというような形のインストラクションになっております。いずれも、購入の作品もそうですが、ユニークピースということになります。「セル・フォンズ」は５つの携帯電話をモニターとして作られた類例の作品でございます。

続きまして、12番から13、14、15までの作品が大岩オスカールさんの作品になります。こちらは寄贈なのですけれども、大岩オスカールさんは、2008年の個展を契機として複数の作品を所蔵するとともに、作家から、今回提案している作品を寄託という形で長くお預かりして活用させていただいておりました。今回、購入の案件と、それからＭＯＴコレクションへの出品等々のやり取りの中で、既に寄託をいただいている作品を改めて御寄贈いただけるというお話をいただきましてお諮りしております。こちらも実見いただけますので、詳細は割愛させていただきますが、既に国内公立館、それから海外での収蔵もございますので、御確認ください。

続きまして、寄贈の16番、棚田康司さん、「精霊の母子」になります。こちらは木彫の作品です。いわれとしまして、作品説明にあるのですけれども、東京都福祉保健局のほうで清瀬小児病院跡地のための記念碑として、ブロンズ彫像の制作委託を行った際に、武蔵野美術大学のチームとして受注された棚田さんがブロンズ像の原型として作られた木彫でございます。その意味でも東京都との関わりの深い作品でもありますとともに、母子像という棚田さんの作品の中でも非常に珍しい作例であるということで、貴重な作品かと思います。国内公立美術館に多数入っている、金額は記載のとおりでございます。当館でも複数の作品を収蔵できておりますが、少年、少女像の全身像というものが入っていなかったということも含めて、こちらを加えていけたらと思っております。こちらも実見いただければと思います。

続きまして、17番、百瀬文さんの「Flos Pavonis」という映像作品です。こちらも事前にリンクを送らせていただきました。2021年、昨年の横浜市民ギャラリーでの「新・今日の作家」展に出品されたばかりの最近作でございます。シングル・チャンネル・ビデオで、30分の作品で、エディションは５分の１になっております。百瀬さんの作品は、割と現場でのパフォーマンスを記録するようなスタイルのものもこれまでは多かったのですけれども、この作品では、コロナ禍で作られたものであるにもかかわらずかなり大規模な撮影をされていまして、会話劇の部分ですとか、編集としてもナラティブをつなぐような形での編集に取り組んでおられますので、これまでの作品に比べて映像作品としての規模感、それからナラティブ、ドラマ作品としての規模感という意味でも、かなり挑戦をされた作品です。だらだら長い30分ではなくて、きちんと構築されたドラマとしての30分を撮るためにはそれなりの制作費もかかったものと推察されます。収蔵の取引事例としましては、既

に国内の公立館、複数館に入っております。このような数字ですが、今回の作品は、既に入っている作品に比べてプロダクションの規模が大きいということは特筆しておいてよいかなと思います。内容的にも今日的な問題に踏み込み、また、これまでやってきた作品の中で培ってきたアプローチ、それから、今後増えていくだろうフェミニズムの文脈にも効果的に位置づけられる内容ということで重要な収蔵になると考えております。

続きまして、18番、19番です。個人の方からの寄贈という形なのですけれども、ジャスパー・ジョーンズの初期のシルクスクリーン作品でございます。18番がターゲット、「標的」がモチーフ、19番が「うすゆき」というシリーズからの１点になってございます。ジャスパー・ジョーンズについては、皆様に御説明するまでもないと思いますが、当館では96年に大規模な個展をしているにもかかわらず、既に価格が高騰しておりましたこともあり収蔵ができていない作家の一人でございます。今回の作品は個人のお手元にあったものですので、コンディションを実見いただきまして、それを加味した御評価になるのではないかと思っております。取引事例としましては、国内の美術館の場合、この時期のシルクスクリーンは日本との関わりも深く、ギャルリームカイの創設によるシムカ版画工房と一緒に共作によってジャスパー・ジョーンズがシルクスクリーンの実験を重ねた作品として有名ですけれども、そういう意味で、リアルタイムにかなり制作、発表された頃に国内の館等にも複数入っているのですけれども、その後、購入できている事例が手元にございませんので、こちらは80年代の購入の事例が挙がっております。参考までに、海外オークションで取引された実勢の金額も入れてございます。こちらはもちろん来歴ですとか保存状態によって、上がるときにはこのぐらいの金額になるという指標の一つとさせていただきます。「うすゆき」についても同様でございます。

最後に、寄贈の作品ですが、20番、「シリーズ　深川の旅」と申します。ワタリドリ計画、こちらは麻生知子さん、武内明子さんという若手の画家として活動されている方たちが、ユニットとして作品の題材と展示場所を求めて各地を旅して、その場所ならではの作品を制作するプロジェクト型の作品の成果でございます。当館で2020年度に実施しましたＭＯＴサテライトのほうで、委嘱という形で、清澄白河、深川近辺にリサーチをしていただきまして、その成果として、かるた形式のマルチプルを作っていただいたのですけれども、その制作の過程で生まれた元絵を含む一連の作品をまとめて収蔵させていただくことで、この地域と連携してきたプロジェクトの履歴を残すとともに、こういった画家を生業とする作家たちがユニットとしてそういうプロジェクトを手掛けるという、ある意味、今日的な在り方の一例を示す意味でも有用かと思っております。取引事例としましては、個々の活動の中で取引された平面作品の取引事例を記載させていただいております。何しろアイテム数がとても多くて、それの組み合わせで、こちらでもコレクション展なんかで紹介する際には組み合わせを変えて展示してよいということなので、そういった可変性も含めて活用できればと思っております。

以上が説明書の内容でございます。

**大森文化施設担当課長：**ありがとうございます。

作品の検分終了後に質疑応答の時間を取っておりますが、現段階で何か御質問はございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、会場を移しまして作品の検分をしていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

（　委員離席　）

（　作品検分　）

（　委員着席　）

**大森文化施設担当課長：**それでは、作品を御覧になりまして何か御意見、御質問がございましたら、お願いいたします。――よろしいでしょうか。

それでは、評価方法の説明をさせていただきたいと思います。

冒頭、御説明いたしましたＡ４横の評価表に金額を記載していただきまして御署名を頂きたいと思います。評価額の最高価格と最低価格を除いた残りの平均値を評価額とさせていただきます。金額は税込みのものを御記載ください。

それでは、まず御記入の前に、実は今年度で任期を終えられる委員の方がいらっしゃいます。前山委員と南委員におかれましては、平成25年８月以来、４期８年にわたって本収蔵委員会の委員をお務めいただきました。長年の御協力に感謝したいと思います。

それでは、少しお時間をいただいて、お２人に一言御挨拶を頂戴できればと思いますので、前山委員からお願いできればと思います。

**前山委員：**今、聞いてびっくりしましたが、８年もやっていたんだなと改めて驚きました。別に何かということはございませんが、皆さんにお世話になりまして８年間務めることができました。これからもどこかでお会いすると思いますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

**大森文化施設担当課長：**それでは、南委員お願いします。

**南委員：**右に同じくなんですけれども、どうもお世話になりました。私も前にここにいたので、８年間楽しく委員をさせていただきました。どうもありがとうございました。

**大森文化施設担当課長：**ありがとうございます。

それでは、お手元のボールペンで評価表の御記入をお願いしたいと思います。御記入が終了した方は、挙手いただければ係員が取りに伺います。係員による確認後、お声がけいたしますので、評価表の記載が終了しましたら御退席いただいて構いませんので、よろしくお願いいたします。

あと、改めての御説明になりますけれども、本日の資料収集部会の議事録については、改めて御連絡を差し上げます。当部会の議事録は、資料収集決定後、公開を予定しておりますので、事前に内容の御確認のため後ほど御連絡させていただきます。また、お配りした資料については一式回収させていただきますので、机の上に置いたままにしていただければと思います。よろしくお願いします。

**佐谷委員：**評価方式は上と下を切るとか、そういうことはやるんでしたか。

**大森文化施設担当課長：**そうです。最高額、最低額を除いた残りの金額で平均値ということにさせていただきます。

**佐谷委員：**この百瀬さんの寄贈というのは作家からなんですか、今回ほかには購入はないんですか。

**岡村事業係長：**映像作品を別途３点、旧作を購入いたします。

（　委員評価表記入・回収　）

午後３時44分閉会

以上